

## ロシア・ソヴィエト言語類型論とカフカース諸語

柳沢 民雄

## 1.

スターリン時代のソヴィエト科学については生物学におけるルイセンコの似非科学が有名である。ルイセンコ学説は「獲得形質が遺伝する」という学説であり、これは生物学のセントラルドグマに反する説である（秋播性小麦を温度調整することで春播性小麦に転換できるとする説。つまり温度環境を調整するだけで一、二代で播性の遺伝を変えることができるとする）。このルイセンコ学説がマルクス主義の遺伝学としてスターリン時代に公認され、これがスターリン時代とその後のフルシチョフ時代に猖獗を極めた結果、農業生産に壊滅的な打撃を与えた<sup>1</sup>。

ソヴィエト時代のルイセンコ学説は全く似非科学であったが、ソヴィエト言語学はどうであったか。ソヴィエト言語学といえばこれも悪名高いマール Н. Я. Марр の「ヤペテ学説 яфетическая теория」がある。マールは最初、カフカース地域の研究（『古代アルメニア語文法』(1903) や『チャン語（ラズ語）文法』(1910)等を参照）を行っていたが、特に革命以後、理論研究を志向するようになった（なおマールのカフカース諸語研究のレベルは高い。例えば、『アブハズ・ロシア語辞典：講義と研究のための参考書』(1926) は、特殊な文字を用いているが、今日でも方言資料—アブハズ語の Bzyp 方言—として役立つ<sup>2</sup>）。1923 年にマールは『言語についての新学説』を出版する。

彼の「4 要素」によって世界の言語の起源を関係付けようという説はよく知られている。彼は音声言語の発生の際に、言語起源的に 4 つの要素 элемент があると主張する。マールは、これをそれぞれラテン語の大文字の A, B, C, D で表す。世界の全ての言語は、語彙的な部分であろうと、文法構造についてであろうと、これら 4 要素の

<sup>1</sup> 我が国でも戦前から生物学者の八杉龍一によってルイセンコ学説が好意的に紹介された。戦後もマルクス主義や唯物論を信奉する科学者、例えば、武谷三男らに支持され続けた。最近、ルイセンコ学説を支持した八杉龍一や武谷三男らの科学者の「自分の過去の言動に責任を持たない態度を詳しく検証することを通し、戦後生物学思想史を一つの側面から総括」した、伊藤康彦著『武谷三男の生物学思想「獲得形質の遺伝」と「自然とヒトに対する驕り」』（風媒社 2013）が出版された。

<sup>2</sup> 拙著、A Dictionary of the Bzyp Dialect of Abkhaz. T. Yanagisawa. 「北西カフカース諸語の類型論的研究。平成 24-平成 26 年度科学研究費（基盤研究 B）成果報告書」、pp. 82-174. 参照。ここでは Bgazhba (1964) の資料とともにこの Marr (1926) の資料も使っている。

組み合わせから成っているとす。「これらの要素は、初めには何も意味しなかったが、ただ魔法的方法の機能だけをもっており、あとでトーテムになり、さらに信仰の対象となり、さらに個々の社会集団の神々となり、そしてさらに後に種族の名称になった。」

(Март 1937. *Избранные работы*. Том 4: стр. 59. [1928年の講演])

マールによれば、これらの各要素の発音は、sal (要素 A), ber (要素 B), yon (要素 C), roš (要素 D)であり、種族の名称であったという。マールはこの4要素の組み合わせから、語の創成を具体的に行っている。用いられる言語はマールが手にした世界中の言語である。これをマールの該博な言語的知識をもって、驚くほど多くの頁を使って、例えば、マールの5巻選集の多くの論文の中で(第4巻はほぼ全て)行っている。例えば、be 動詞の起源について書いた論文の一節から：「一方、《絶対に存在する》という発展段階の起源を例示するためには、グルジア語の動詞 *суфев-с* „существует”, „есть” を引用すれば十分である。その語幹 *суфе* は、かつてトーテムであり、然るべき集団の名称であり、「存在する」という動詞が発生する以前に、後になって生じた絶対存在の観念の代表者になることができたに違いない。(中略)この動詞の語幹は、混交された (AB) *su-φε* である (-v は付加された補助動詞);古生物学が明らかにするように、この語幹は宇宙的・抽象的には「空」,「太陽」を意味し、社会的には「トーテム」(シャーマン),「神」,「神官」,「主」(Seigneur) ...を意味する。」(Март 1934. *Избранные работы*. Том. 3: 87 [1930年に報告])

これはルイセンコ学説と同じく荒唐無稽な説である。4つの要素を当てはめ(ここでは要素 A = sal と B = ber を「混交」させ、*su-φε* を導く)、音変化をここに繰り返せば、どのような言語の形も創成することは可能であろう。マールが何故これほどの奇妙な熱情に取り憑かれているのかは理解できない。一種の「語源探し」は、人を熱狂させるのかもしれない。

その後、マール主義者達はヤペテ理論とマルクス主義を合体して、言語の階級制を唱え出す。このマールの言語の階級制の思想は、マールの「正統な」後継者であるヤーコヴレフ Н. Ф. Яковлев の次の発言に見て取れる：「かくして、アブハズ語では、他のカフカースのヤペテ諸語と同様に、受動表現(態)は新たに生じている現象である。ある歴史的時代における原始共産制度の条件において、人間がまだ搾取の対象でなかったとき、人間が奴隷所有者の手中にある生産手段となっていなかったとき、社会の構成員の名称はまだ道具の形、つまり具格補語の形では語られなかったし、考えられなかったのである。」『アブハズ語文章語文法』<sup>3</sup> (2006, p. 69)。ヤーコヴレフは音韻論

<sup>3</sup> ヤーコヴレフはアブハズ語文法を 1950 年ごろには書き上げていたと思われるが、ソヴィエト時代

の分野においても、またカフカース言語学の記述文法の分野でも優れた業績を残しているが<sup>4</sup>、次第にマール主義にはまり込み（すでに 1920 年代始めからマールの傾向を見せている。トゥルベッコイのヤコブゾンへの 1922 年の手紙参照<sup>5</sup>）、最後にはこのように言語構造を階級的な社会構造と直接的に結びつけるという乱暴なことを行っている。しかしソヴィエト言語学がルイセンコ学説と同じくマールの「4 要素」などという荒唐無稽な考えに（あるいはヤーコヴレフのような、言語構造と社会（階級）組織とを直接結びつけるというような抽象的な空理空論に）陥ってしまったかといえ、生物学とは異なった歴史を辿っていることも事実であり、これは特に強調されねばならないことである。

## 2.

マールの死（1934）の後、マール主義を継承しながらもメッシュャニーノフを中心とする「マール名称言語と思维研究所（Институт языка и мышления имени акад. Н. Я. Марра = ИЯМ）」の研究者たちは実際の諸言語の資料を使いながら研究を進めている（ここではメッシュャニーノフを中心とする研究者の学派を「メッシュャニーノフ的類型論学派」と呼ぶことにする）。デスニツカヤ Десницкая（1984: 7ff.）によれば、ИЯМ では「文の類型論、すなわち能格構造と主格構造の方法による主体・客体関係の表現特徴と結びつく諸問題」が議論されたという<sup>6</sup>。彼女によれば、この 30 年代の

---

にはこれを出版することはできなかった。21 世紀になってアブハジアの首都スフミより初めて出版されたが、残念ながら、内容のレベルは評価できるものではない。

- <sup>4</sup> ヤーコヴレフの音韻論研究については、柳沢民雄「N. F. ヤーコヴレフ—音韻論、カフカース学、ロシア語学—(1)」名古屋大学国際言語文化言語文化論集、36-1, pp. 169-178, 2014 参照。
- <sup>5</sup> 1922 年 12 月 20 日のトルベッコイからヤコブゾンへの手紙には次のような内容が書かれている：「私は最も長い手紙をヤーコヴレフに書いたが、返事が来ない。もしあなたが彼に手紙を書くときは、どうしているか訊ねてほしい。彼が怒っているのではないかと思う。というのは私はマールについて大変手厳しく批判した。ヤーコヴレフがマールに入れあげていることを咎めたからだ。」(N. S. Trubetzkoy's Letters and Notes. Prepared by R. Jakobson. Mouton. 1985: 40. [Письма и заметки Н. С. Трубецкого. Москва, 2004: 147])
- <sup>6</sup> デスニツカヤは、ソヴィエトの 30-40 年代に能格研究が活発になった理由を次のように書いている：「30-40 年代に文の能格構造についての問題は、ソヴィエトの言語学者達、特に《言語についての新学説 новое учение о языке》（その《メッシュャニーノフ的》変種において）の基本思想をある程度共有した部類の言語学者達の非常に大きな注意を引きつけた。能格性については、非常に熟慮され、多く語られ、書かれ、議論された。当然、他の誰よりも早くこの問題に興味を持ったのは、カフカース学者達であった。彼らにとってこの問題はたんに理論的意味だけでなく、また実践的意味ももっていた（北カフカースの文字を持って間もない諸言語の学校文法の作成の課題と関連している）。しかし疑いなくある一定の役割を果たした実践的側面のほかに、能格構造への関心は、文法的類型論——つまりマールの死後、《言語についての新学説》において目立って優勢になってきた研究方向——の分野における特別な研究側面への動向と直接に関連する、理論的問題点への解決

時期における能格性 *эргативность* の理論構築において最も重要な研究は次の3人の研究であるという：a) ボカリョーフ A. A. Бокарев によるアヴァール語の能格性の研究（例えば、『アヴァール語統語論』1949年に死後出版）<sup>7</sup>；b) カツネリゾーン C.

の糸口をそれが与えてくれることによって刺激された。また考慮しなくてはならないのは心理的要因である。即ち、20-30年代の時代に多くの若き文献学者達の学問的興味の形成に、ある程度影響を与えたカフカース学の人々の心を引きつける力である。ロシア文化の昔の伝統の中に土台を持っていた、カフカース的テーマの人々の心を引きつける力、一種の魅力は、マールの特別な学問的な関心と意気込みのおかげで、新たな刺激を受けた。マールは彼によって《ヤペテ理論 *яфетическая теория*》と名付けられた自分の理論の初期の構築において、カフカースの諸民族と民族文化に独自の立場を割り付けた（《ヤペテ理論》というのは、マールによって認められたカフカースの諸言語と民族を《ヤペテ諸言語、諸民族》と呼ぶ呼称と結びついている）。

古典的明晰さと多種多様性を有するカフカース諸語の中に、《能格性》という呼称を得た文法構造の見本が現れているということのために、またこの点でカフカース諸語がバスク語と典型的に類似しているというまさにこのために（マールはバスク語を《ヤペテ語》とまた命名して、それにカフカース諸語と並んで自分の基本構想の中で独自の位置を振り分けた）、まさにこの構造的な一致によって初めて、マール自身の記述の中ではまだ大変ぼんやりした特徴を持っていた、言語段階理論 *теория языковых стадий* がより明確な言語学的輪郭を獲得し始めた。」（Десницкая, 1984: 7f.）

<sup>7</sup> デスニョッカヤは、A. Бокарев の研究について次のように高く評価している：「驚くべき精密さと深い言語学的分析をもつアナトーリイ・ボカリョーフ Анатолий Бокарев の研究において、文の能格構造を有する言語の統語体系の記述の課題が解決された。文章語の原資料と、ネイティブスピーカーとともに入念に点検されたフォークロアの原資料から引き出された大部な資料を基にして、著者は、表現される行為の目標と結びつく動詞述語の特徴によって異なる、述語構文の若干のタイプの実際の機能化を指摘した。述語構文の次のようなタイプが区別された。そこでは主体・述語関係および主体・客体関係の多種多様な伝達方法が提示されている：1) 自動詞述語を有する文；2) 他動詞述語を有する文；3) 感覚動詞によって表現される述語を有する文；4) 知覚動詞によって表現される述語を有する文；5) 他動詞の自動詞的使用と自動詞の他動詞的使用；6) 述語としての持続アスペクト *длительный вид* の動詞；7) 述語としての使役相の動詞；8) 述語の役割での分詞；9) 合成述語とそれに関連する諸現象。かくして、他動詞と主体の特別な能格（活格 *активный падеж*）を有する他ならぬ能格構文は、アヴァール語に存在する主体・述語関係および主体・客体関係の全ての伝達方法の広い状況下での代表的構文であることが明らかになった。全く同様に活格（能格）もまた、格の全体系の背景のもとで、およびそれに固有の機能、即ち他動詞を有する構文における主語と補語（道具と行為手段の意味で）の相互関係において示された。与格と位格にとってもまた、それらの残余の機能（補語と状況語の異なるタイプ）とともに、ある一定の意味の動詞述語における主語を表すための、それらの格に固有の機能の相互関係が示された。能格的統語論を規定する、他動詞と自動詞を有する構文の対立の不変的厳格さをあたかも破るような場合の分析は、著者をして共時的記述体系の中にそのより深い通時的な段階を見つけだすことを可能にした。例えば、他動詞の自動詞的使用と自動詞の他動詞的使用についての章の中で、A. A. Бокарев は次のように書いている：《このパラグラフの中で言及された動詞の意味の二重性は、勿論偶然ではありえない。その二重性は、恐らく語彙的および統語的な同じ動詞における、対立する統語的（またある場合には語彙的な）意味の発達の結果としてのみ説明されよう。同じ音形における二つの異なる意味の一致は、以下のような推測を非常に確実性のあるものにする：動詞の現在の意味の二重性を通して、動詞の他動詞と自動詞への今日支配的な区分によって覆われているより古い関係がほのかに見える。この意味の二重性の歴史的基盤であるのは、明らかに他動性と自動性の区分の欠如である。ある動詞はその後、自動詞として固定した、しかしそれらの他動的使用の可能性は、他動性と自動性に関してそれらの昔の区別の欠如を示している。他の動詞は主として他動詞として固定したが、しかし自動詞としてのそれらの使用は同じ区別の欠如を示している！》（Бокарев 1949: 47）

Д. Кацнельсон の『主格文の起源に寄せて』(1935年の学術論文, 1936年の単著)  
【この論文は С. Д. Кацнельсон (2010) の中で表題の論文とともに複製された】<sup>8</sup> ;

カフカース諸語に特徴的な能格構造の本質と起源を理解するために大変重要な意味を持っていたのは、構文タイプと動詞のアスペクト的意味の間の関係の発見である。アヴァール語の他動詞の特徴の1つは、ボカリョーフによれば、「他動詞は、もし持続的行為を表す必要があるならば、自動詞になるということである」。ボカリョーフによる厳密な統語的な概念と術語によって行われたアヴァール語の能格構造の記述と比較すると、類似の構造の後の記述の内の若干のものと同じく彼と同時代の記述は表面的で不十分なものに思われる。」(Десницкая 1984: 10-11)

- <sup>8</sup> カツネリソーンのこの研究についてもデスニーッカヤは次のように書いている：「若い学者が一気に理論家として認知を獲得した S. D. カツネリソーンの修士論文『主格文の起源に寄せて』は、統語範疇の歴史類型論の問題に捧げられ、その起点となる考えとしてマールの言語発達の段階性についての基本思想を持っていた。その中で著者は、世界の大多数の言語に現在みられる主格構造の発生に、能格構造 *эргативный строй* — 文の発達においてより初期の段階であるものとしての — が先行したはずである、という命題を発達させた。かくして能格性の普遍の特徴が確立した。能格構造から主格構造への推移は、カツネリソーンによって意識発達におけるある一定の前進を反映した《壮大なスケールの革命》(Кацнельсон 1936: 103) として特徴づけられた。文の類型論の諸問題への《段階的 *стадиальный*》アプローチは、次の言葉の中に明白に表現されている：「相異なる体系の諸言語における文構文の対比対照は、形態的形成の相違にもかかわらず、社会発展の同じ段階における意味論的および統語的内容の同一性、つまり人間の思惟の起源と発達の一致に立脚する同一性を明るみに出している。」(ibid. 9) 文献にある記述を用いて、カツネリソーンは能格構文の基本的特徴を、主にシューハルトの著作や、特に K. ウーレンバックの著作を拠り所としながら記述しまとめた。《(未開の意識における客体的および主体的) 意識の分野への特別な補遺》は、未開の思惟の中に蓄えられた文の能格構造の原初の意味論的基盤を決定すること、すなわち能格構文の《イデオロギー的内容》を提示することを目的にしていた。」(Десницкая, ibid. 11f.)

デスニーッカヤは、カツネリソーンの能格構文が「未開の思惟」に由来するとの考えを批判してこう書いている：「カツネリソーンがかなり漠然と活動的な力の外的な根源と結び付けたのは、他動詞の能格構文の最も顕著な特徴のうちの一つ、つまり斜格に属する特殊な活動格(能格)としての *agens* の設置である。カツネリソーンは、ウーレンバックが能格構造の他動詞文の組織に宗教的契機を導入していると考え《行為を行う対象の活動性を規定する隠れた力の流失、同様に < *Causus energeticus = casus emanativus* > 》、ウーレンバックが提示した説明を全体に否定した。それ故、人あるいは対象の「行為性」の「外的」特徴という彼の説明は理解しにくいものになった。(…) その結果、他動詞述語における主体の斜格を有する、能格構造にとって特徴的な構文の発生は、本質的に解明されないままに残ってしまった。また一般に、能格構造の特徴を規定する文法現象の全複合体は、カツネリソーンが自分の『補遺』の中で再建しようとした段階から導き出した未開意識の、彼に帰せられる資質の中で十分な根拠を得られなかった。ただ本質的に別な、文の《前主格》構造の一般的輪郭だけがくっきりと現れていた。」(Десницкая, ibid. 12f.) さらにデスニーッカヤは、カツネリソーンの能格研究において重要な点を次のように指摘している：「カツネリソーンの基本構想において根本的に重要な契機は、彼によって明確に提起された《実在の *актуальный*》能格性と《残滓的 *пережиточный*》能格性との違いであった。別の言葉で言えば、《世界の多くの諸言語に保持されている能格構文》と、意識のより原始レベルに応じた社会発展のより初期の段階に存在した《能格構造》との間の違いであった。《文の構文 *конструкция* と構造 *строй* を混同してはならない。世界の諸言語の大部分の文構文は主格的である。》(Кацнельсон, ibid. 103) この観点からすると、残滓的なのは北カフカース諸語における能格構文と、またカツネリソーンを考えによれば、印欧諸語(および他の諸言語)に現れている能格構造の特徴である。」(Десницкая, ibid. 13f.)

カツネリソーンの「原始レベルに応じた社会発展のより初期の段階」としての能格構造という考えは、言語構造と社会組織を連動する考えのように思えるが(勿論、カツネリソーンは言語と階級

c) Мещанинов И. И. 『言語についての新学説：段階的類型学』 (1936) と 『一般言語学：語と文の発達における段階性的の問題に寄せて』 (1940).

### 3.

A. A. ボカリョーフは、上記の統語論の中でアヴァール語の典型的な単文・完全文として次の4つのタイプを確立している：1. 自動詞述語文：эмен (“отец”, nom. sg.) рокъове (домой) в-уссана (masculine-вернулся) „отец домой вернулся“, 2. 他動詞述語文：инсу-ца (“отец”, ergative sg.) хур (“поле”, nom. sg.) б-екъана (non-human “поле”-пахал) „отец поле пахал“, 3. 感覚動詞によって表現される文：инсу-е (dat. sg.) жиндирго (своего) лъимер (ребенок, nom. sg.) б-окъула (non-human “ребенок”-любит) „отец любит своего ребенка“, 4. 知覚動詞によって表現される文：инсу-да (loc. sg. No.1) жиндирго вас (“сын”, nom. sg.) в-ихъана (masculine “сын”-видел) „отец видел своего сына“. (ibid. 13ff.)

これから分かるようにこれらの文タイプにおいて主体である「父 отец」の格は全て異なる。また動詞のクラスマーカーは多くの能格言語と同様に自動詞の主語と他動詞の直接目的語、その他の感覚動詞や知覚動詞の意味上の目的語に一致する<sup>9</sup>。「かくして、他動詞と主体 субъект の特別な能格 (活格 активный падеж) を有する他ならぬ能格構文は、アヴァール語に存在する主体・述語関係および主体・客体関係の全ての伝達方法の広い状況下での代表的構文であることが明らかになった。」(Десницкая, 1984: 10) また、ボカリョーフは同著第7章の「述語としての持続相 длительный залог の動詞」の箇所 (Бокарев, 1949: 51ff.) で、他動詞構文から派生した持続相構文は、基の他動詞構文の目的語が欠如した自動詞文になることを書いている。例えば、他動詞構文 дос (ERG) бецулеб буго ххер (ABS) „он (ERG) косит сено (ABS)“, 持続相構文 дов (NOM = ABS) вуго вецарилев „он (NOM) косит“。この構文の特徴を

---

を直接に結び付けるような乱暴なことはしていないが、能格性と社会組織(あるいは人間の思惟)とに何か関係あるとするような考えは今では否定されている。これについては、Dixon (1994, §8.2) を参照されたい。

<sup>9</sup> アヴァール語は上の例でもわかるように、動詞には名詞と相互照応指示する接辞標示がつく。в- は単数男性、б- は動物、物、現象を表す名詞と相互照応指示する標示である。動詞に付くこれらの標示 (クラス標示といっている) は、自動詞の主語 (S) と他動詞の目的語 (O) に相互照応指示する (能格パターン)。他動詞の主語 (行為者) は動詞には相互照応指示する標示をもたない。名詞は、能格 (他動詞の主語) と絶対格 (他動詞の目的語と自動詞の主語) が対立している (能格パターン)。名詞の格は豊かであり、また名詞 (及び代名詞、形容詞) にもクラス標示が見られる。例えば、вас 'мальчик', лъикъа-в 'хороший'。アヴァール語については、Г. И. Мадиева (1967: 225-271), Алексеев & Агаев (1997) 参照。

ボカリョーフは次のように書いている：「持続相動詞の最も重要な意味特徴は、行為そのものを特徴付けることではなくて、主体がこの行為に関係していることを特徴付けることであり、主体が行為遂行の過程にいることを示すことにある。（中略）従って、持続相の動詞の主体は、動詞語根のなかで表現された行為の客体と直接的に結びつかず、そして、この場合のその働きは本質的に自動詞的である。」(ibid. 58) これはすでにウスラールによっても発見されていたことであるが(Услар. 1889: 196ff.)、この派生は後に Dixon よって定義された「逆受身 antipassive」と同じプロセスの派生である。即ち、基底の能格は派生の主語(絶対格)になり、基底の目的語は省略される(アヴァール語では削除される)。動詞は接尾辞 *-ap-* によって派生されている。動詞述語は、基底の能格構文では目的語の *ххер „сено”* に相互照応指示されているのに対し(物の *б-* 標示)、派生構文では主語(絶対格)の *дов „он”* に相互照応指示される(男性の *в-* 標示)。Dixon (1994: 149) は逆受身についてこう書いている：「逆受身は、目的語の身元を背景化しながらも、基底の A (他動詞の主語) の対象が目的語を含んだある動作に参加している、という事実焦点を当てる。」これはボカリョーフの持続相の構文とほぼ同じ意味内容である。この現象をソヴィエト言語類型学は発達させることはなかったが、ボカリョーフがこの現象を記述していたことは注目に値する。

他方、カツネーリソンは主格構造の前段階としての能格構造を仮定し、次のように述べている：「(能格構文という) この現象は、形態論的な表現形式の違いにも拘わらず、大量の諸言語の中に跡づけられるという事実は、偶然の状況がこの構造を作り出したのではないこと、その構造は文の発達における一般的に意義のある段階であることを物語っている。」(Кацнельсон, 1636: 63) [2010: 71].

#### 4.

メツシャニーノフはソヴィエト内の非印欧諸語(特に北方諸語)を資料にして共時的な統語論を研究している<sup>10</sup>。メツシャニーノフの1940年に出版された『一般言語

<sup>10</sup> デスニーツカヤはメツシャニーノフの類型学研究について次のように書いている：「文構造の段階的類型学 *стадиальная типология* は、30年代半ばよりメツシャニーノフの報告や論文、及び著作の支配的テーマになり、まさにそのことによって所謂、《言語についての新学説》の歴史における《メツシャニーノフ的》時代を開いた。メツシャニーノフによって発達された研究方向は、全体として我が国における言語研究に力強く好ましい影響を及ぼした。文法カテゴリーの内容面への特別な注意と、それらの発生と機能化の歴史的規則性の顕現の目標とを伴って、言語構造の共時的研究および通時的研究を刺激した。メツシャニーノフはその1934年の綱領報告の中で、《言語内的現象》の研究課題を定式化し、《個々の諸言語の知識の深化》と《直接に言語事実に》立脚することが必要であると考えた。理論面における言語学の課題は、彼によって文法現象の歴史的類型論の諸問題への明確な方針とともに明確化された：《文法カテゴリーとそれの語中における外的表現の変種

学:語と文の発達における段階性の問題に寄せて』の各章の一部を抜き出してみれば、「語・文 слово-предложение」,「文の一部としての抱合的複合 инкорпорированные комплексы как части предложения」,「統語的複合 синтаксические комплексы」,「語と文の発達における段階性の問題 проблема стадильности в развитии слова и предложения」,「受動(所有)文構造 поссесивный (притяжательный) строй предложения」,「能格文構造 эргативный строй предложения」,「接辞と位格の文構造 аффективный и локативный строй предложения」,「主格文構造への移行 переход к номинативному строю предложения」などの用語が並ぶ。メツシャニーノフは共時論的にこれらの文構造を検討している。例えば、「語・文」の章では生きている北方言語,特にユカギール語やチュクチ語の例を用いて,文全体が1つの語によって表現される例が検討される:「抱合された成分は形式的には語であるが,内容的には文である」(ibid. 74)。「抱合的複合構造全体は独自の言語類型を現している」(ibid. 75)。そして次のような興味深い結論を導き出している:「抱合は質的に全く別の類型的な標識を有する言語段階構造についての証拠として特別な興味を与えてくれる。さらに抱合は,我々により馴染みのある様々な文成分を有する言語構造に段階的に先行している,との結論に到達することができる。もし我々が北アジア諸語やアメリカインディアン諸語などの2つの共存する構文のなかで,即ち抱合複合と個々の語から成る文において,同時に使われることになった2つの段階的に異なる構造を認めるならば, 1

---

の出現の意味と原因を説明することが出来るのは, ... ただ言語起源のプロセスの全体と, また時間と空間, 即ち連続して交替する段階と共時的言語分類(グループ分け)における, その顕現の多様性を考慮した歴史的アプローチによってだけである」。同じ報告の中で, メツシャニーノフによって初めて段階的現象としての能格構文の解釈が提案され, 文の主格構造を持つ諸言語における能格構文の形態的残滓の保持についての見解が述べられた。ウーレンベックの基本思想に立脚しながら, 彼はその当時彼によって《魔法的なもの магическое》として定義された未開の思惟の特徴の中に, 能格構文の起源の解釈を捜し求めた; 歴史的に与えられた言語構造の中に彼は, 論理的思考のノルマに応じて古い文法形態の再編と再解釈の連続した諸相の堆積を発見した。予定されたプログラムの実行に捧げられたのは, 『言語についての新学説』(1936) という本であった。これは 1934-1935年にレニングラード大学の文学部で講義された研究講義コースを基にして出版された。この著作の中で主体・客体関係の表現の歴史類型論の問題が, あまり研究されていない一連の諸言語の生きた資料によって初めて研究された。若干の北カフカース諸語(アブハズ語, レズギン語, アヴァール語, ダルギン語, ラック語, ウディン語)以外に分析の対象となったのは, また古アジア諸語(アレウト語, ユカギール語, チュクチ語)であった。それらの言語は言語理論の諸問題の提起と解決のための資料として, メツシャニーノフによって初めて研究された。上で述べられた言語以外に研究の対象となったのは, ネメブ語 немепу(サハプチン сахаптин 語グループの内の北米インディアンの言語)とウラルト語の文構造, また南カフカース諸語の文構造である(後者は主格統語論のノルマへの能格構文の再編の見本として研究された)。この研究段階でメツシャニーノフは, 次のような段階の時代区分の図式を提示した: 1) 活動・神話的(活動・受動的)段階, 2) 受動的(受動的活動化)段階, 3) 能格(形式的受動)段階, 4) 活動, あるいは活動・論理的(形式的・活動的)段階 (ibid, 329ff.)」(Десницкая, ibid. 14ff.)



つは古くてまだ絶滅していない構造，他はそれに替わって，それから発達した新しい言語構造であることは誇張ではないと私には思える。この場合，アーカイズムは前者，つまり抱合複合である。」(ibid. 78) これからメッシュャニーノフの研究方法とその構想の一端がわかる。即ち，彼は上に挙げたような様々な類型的な文構造を共時的に検討しながらも，それらの文構造の類型を「段階的な」発達（これはマール主義の考えを引きずっているが，階級闘争というような短いスパンでなく，文構造が変化するというようなかなり時間的に長いスパンを考えているようである）の中で見ようとしている<sup>11</sup>。

そのために主格言語類型の前段階として能格言語を含めた様々な言語類型を探求する。例えば、メッシュャニーノフの能格構文から主格構文への変化の考えは、Мещанинов (1940: 199ff.) にコーカサス諸語のカルトヴェリ諸語を例に用いて書かれている。メッシュャニーノフの考えに拠れば，能格が他の格（例えば、具格）と兼務していない場合，即ち能格標示が行為者だけを表すための能格機能だけに当てられている言語は，主格構文へ移行するとされる。この能格の特徴をメッシュャニーノフは次のように書いている：「石化した形の能格 [メッシュャニーノフの言う能格が行為者機能しか使われない能格をいう] は，それら [カルトヴェリ諸語] の中で能格構文の専ら行為者の格である。それはこの役割をだれによっても代えられず，自身は別のどんな意味でも現れない。それで，グルジア語では《-ma[n]》の格，メグレ語とラズ語（チャン語）では《-q》の格は，能格以外に如何なる他の意味にも現れない。そのような条件の下では，この格はその他全ての格の中で最も活動的な格 **активный падеж** の内容を獲得する；何故ならば，この格は行為者のみを表現するために奉仕するからであり，また動詞はそれと一致するからである。かくして，その格は常に論理的主体 **логический субъект** と

<sup>11</sup> メッシュャニーノフの「段階的」な類型進化の考えは興味深い。これは，勿論，歴史的な進化発展という考えであるが，カツネリソンの前能格性の問題にも通じる考えである。ソヴィエト類型論者達は，メッシュャニーノフのこの考えをその後も踏襲している。例えば，G. A. クリモフの「活格言語 > 能格言語 > 主格言語」への一方向的類型進化の考えを参照。ここにはマルクス主語的な歴史観が影響を与えていると考えてもよいのかもしれない，あるいはダーウィンの生物進化の考えの影響もあるのかもしれない。これに対して類型の推移にはそういった一定進化的なものはないとするのが，Dixon (1994: 182ff.) の考えである。Dixon は言語類型は循環的であり，能格型から対格型へ，また逆に対格型から能格型への推移が可能とする。彼は受動 *passive* と逆受身 *antipassive* をその変化を引き起こす主要原因と考えており，具体的な諸言語（特にクリモフの文献では引用されることのないオーストラリア諸言語を使う）の変化を提示している。クリモフ（あるいはオリジナルはメッシュャニーノフと言ってよいかもしれない）は類型が一定方向へ進化する原因を，語彙化原理の変化，あるいは「思考規範」の変化によるものと考えている。その変化が統語法の変化，形態法の変化を引き起こしたとする。世界には対格言語が能格言語になる例があることから，クリモフの考えは批判に晒される。例えば，印欧祖語（対格型）からヒッタイト語の無生物名詞における能格，あるいはイラン語やヒンディー語の能格構文の発生である。

文法的主体 *грамматический субъект* との表現者となるのである。」(ibid. 200)

メッシャニーノフによれば、こういった「独立的な能格」構造は、主格構文へ接近する傾向があるとする：「他動詞文における行為者の格の意味だけに用いられるので、この格〔能格〕は機能的にも内容的にも主語の格に近づく、しかしそれは主格 (*nominativus*) と同じではないし、またそれと結びつくあらゆる構文はまだ主格構文を獲得していない。これを邪魔するのは、第一に、グルジア語の能格が時制の 1 グループ (アオリスト) でしか用いられないことと他動詞でしか用いられないことである。従って、グルジア語の能格は行為主体しか表さない、一方主格は状態の主体 (中間動詞で、他動詞の受動態で) も伝えることができる。グルジア語の構造では能格はこの状態主体を決して表さない。」(ibid. 201)

これは所謂、時制 (アスペクト) による分裂能格を述べたものだが、メッシャニーノフは能格の機能の主格化の中でこれに言及している点が注目される。カルトヴェリ諸語の中ではこの能格の拡張が言語によって異なって発達している。メグレ語では、本来の能格標示はアオリストで拡張され、他動詞の主語だけでなく自動詞の主語にまで拡張している (主格・対格標示)。一方、ラズ語では、本来の能格の範囲は時制とは無関係に全ての他動詞の主語に拡張されている (分裂能格標示から完全な能格標示に発達している)<sup>12</sup>。メッシャニーノフが能格構造から主格構造への推移 [彼は主格構造の起源 *генезис номинативного строя* という] を考える上で、カルトヴェリ諸語がいかに関心を引いたかはここから理解できる。また、メッシャニーノフは名詞の格標示だけでなく動詞の呼応指示の機能にも注目している。即ち、動詞の呼応指示機能からも能格構文と対格構文を見ようとしている。例えば、彼は能格言語であるダルギン語 (北東コーカサス諸語の 1 つ) とグルジア語とを比較する：「グルジア語の 2 つの例 [現在形の自動詞文 *человек-і ходит-s* と他動詞文 *человек-і строит-s дом-s[a]*] では、主語は同じ格 (-i) であるが、ダルギン語では異なる格である (自動詞で絶対格, 他動詞で能格・道具格) [*человек-ABS v-ходит-г, человек-ERG дом-ABS b-построил-b*]。動詞は、グルジア語では両方の文で主語に一致する (3 人称の -s),

<sup>12</sup> メッシャニーノフ (1940: 214f.) からカルトヴェリ諸語の能格分布を引用すれば、以下のようになる：(1 は自動詞, 2 は他動詞) グルジア語 (能格標示は -ma[n], 主格と絶対格標示は -i, 対格, 与格標示は -s[a]) : 現在形 1. *человек-і ходит*, 2. *человек-і строит дом-s[a]*, アオリスト 1. *человек-і пришел (сюда)*, 2. *человек-ma[n] выстроил дом-і*, メグレ語 (能格標示は -q, 主格と絶対格標示は -i, -e, 対格標示は -s) : 現在形 1. *человек-і сюда-приходит*, 2. *человек-і дом-s строит*, アオリスト 1. *человек-q сюда-пришел*, 2. *человек-q дом-e построил*, ラズ語 (能格標示は -q, 主格と絶対格標示は -i, 対格はなし) : 現在形 1. *человек-і ходит*, 2. *человек-q строит дом-і*, アオリスト 1. *человек-і ушел*, 2. *человек-q выстроил дом-і*.

一方ダルギン語では自動詞は主語に一致し (v- はクラス標示, -r は人称標示), 他動詞は主語と目的語の双方の一致を受け取る (b- は目的語のクラス標示, -b は主語の人称標示). ダルギン語の目的語は絶対格に置かれ, 動詞にクラス標示 b- を伝えるが, 一方, グルジア語では行為の対象は与格・対格に置かれ, 動詞とは一致しない. ここから以下の結論に達するのは容易だ: ダルギン語では一貫した能格構文があるが, 他方, グルジア語の第1時制グループの自動詞文と他動詞文にはすでにそれはない. この場合, グルジア語では自動詞と他動詞は同じく形成されており, それら2つは文の主語である行為者と一致しているし, それに関連してその格は主格の全ての機能を獲得している。」(ibid. 202f.)

メッシュャニーノフは, グルジア語が主格構文に接近していることを補強するために, 受動が派生されることを述べている: 「動詞の能動態をもつこのような文構造と並んで, グルジア語では受動文も作ることができる: 能動態 человек-i s-пишет-s письмо-s(a) «человек пишет письмо», 受動態 человек-is mier i-пишется-eb-a письмо-i «человеком (через человека) пишется письмо» (-i 主格, -sa (-s) 与格・対格, -is 属格. mier は属格要求の後置詞 (через). 動詞の語尾: -s は3人称単数, 受動では -a. 受動態の動詞は受動の -i 標示を受け取る). 後者の動詞は, 同じ主格に立つ (письмо-i, cf. 第1の文の человек-i), 論理的目的語に一致している. この場合, 論理的目的語はその文の中で主語として現れ, 主語の格, つまり主格を獲得している. ここにも我々は主格構文をもつのである。」(ibid. 203)

ここからメッシュャニーノフは主格構文の特徴を述べている: 「従って, 現在時制から派生した時制グループにおいて, グルジア語は十分明確に能格構文から離れてしまったし, 主格文の基本的な特徴の全てを作り上げた. そこには他動詞と自動詞と結びつく句 фраза の明確な構造的違いは存在しない. この両方の主語は同じに形成される. 主語のためには独自の格 (-i) が確立する. つまりその形によって判断すれば, 能格構造で絶対格の名で用いられている名詞形成素によって添付されたのと同じ格が確立する. 行為の客体は動詞と一致せず, 動詞に支配され始める, つまり直接補語の全ての機能を獲得し, その表現のために, その内容に関してはこの場合に行為の目的への方向を指し示す方向的な, 特別の与格・対格を受け取る. まさにこれによって, 目的語なしの文と目的語ありの文の間の——つまり自動詞と他動詞の文の間の——構文的な違いは消える. そしてそれらは, それらにとって共通の文構造を獲得する. それと同時に, 行為者を表現する文成文の [知的] 意味そのものも質的に変化する. 能格構造では, これは実際に行為主体であった, 主格構造ではこれはすでに文法的主体であり,

行為的な文法的主体（行為の主体）でも自分に行為を経験する文法的主体（状態の主体）でもある。ここでは述語は行為あるいは状態にある主体を特徴付ける。ここから、他動詞をもつ文において能動態と受動態が形成される。」(ibid. 203) メッシャニーノフはこれとの関連で印欧語の構造との接近を述べ、ロシア語と文字通りの翻訳ができると述べている。

## 5.

メッシャニーノフは、グルジア語のアオリスト時制グループの文構造の特色（能格パターン）も述べている。自動詞では主格が、他動詞では能格が行為者を表す。メッシャニーノフはこの能格は、化石化した斜格であるとしている（古グルジア語で *-man*、現代グルジア語で *-ma*）。この斜格の意味は、メッシャニーノフによれば、2つの時制グループにおいて対立したものになった：現在時制で主格構造へ移行し、アオリストではまだ能格構文を保持する。メッシャニーノフはこの分裂の理由を述べていない。グルジア語のアオリストにおける能格構文もメッシャニーノフによれば、古グルジア語と比べると本来の能格構文から逸脱しているという。古グルジア語では、目的語も動詞と呼応指示する：「従って、アオリストは古グルジア語においても、他のヤペテ諸語〔北カフカース諸語〕の他動詞の能格構文にとって普通のように、双方の一致〔主語と目的語の相応指示標示をもつこと〕を得る。」(ibid. 205) 現代グルジア語ではこの双方の一致は欠如しており、動詞は主体とだけ結びつく。これから分かるように、メッシャニーノフは能格性のレベルを動詞の呼応指示に見ている。他動詞に主語と目的語の2つが呼応指示する構文は、それが主語とだけ呼応指示する構文より能格性が高い（あるいは本来的な能格性をもつ）と考える。現代グルジア語が他動詞において主語とだけ呼応指示するようになったことは、メッシャニーノフによれば、「かなりの程度、能格構文の規範から外れている」(ibid. 205) と見なされる。メッシャニーノフは、アオリストにおいても現在時制のように受動が派生されるという。彼はこの能格構文の受動〔所謂、逆受身 *antipassive*〕を次のように説明している：「グルジア語の同じアオリストにおいて、受動態があり、そこでは論理的目的語は主格をもって主語の役割で現れる：*kaθ'is mier i-t'era t'eril'i* «человеком написано письмо». 従って、アオリスト時制グループ内で、絶対格と主格は同じ格形で一致する。グルジア語において受動態は、現在時制との類推によって、アオリストにおいても形成される。しかもそれは、能動態と同様に、能格構文に対立している。しかし能格構文は能動態ではない、また能格構文には対格はなく、その対格の場所を占めるのは、他動詞では上で

言及した絶対格である：kaθ'-ma[n] t'era t'eril-i «человек-ERG написал письмо-ABS», cf. kaθ'-is mier i-t'era t'eril-i. それ故、結局、能格文の目的語の格（つまり、絶対格）と受動態の論理的目的語の格は一致した。その際に、この態の構造によって、その受動態の論理的目的語の格は、主語の格（つまり主格）である。もし受動態で t'eril-i が主語（主格）であるなら、能格構文では、たとえそれが能動態としてうけとられようとも、同じ t'eril-i は主格に立つことのできない、直接補語の役割を果たしている。」<sup>13</sup> (ibid. 207)

メッシュャニーノフは、グルジア語は能格構文から主格構文 [対格構文] への言語的再編の素晴らしい例を与えてくれると言う：「グルジア語は、第 1 時制グループ [現在時制] と全ての時制の受動態において後者 [主格構文] にすでに移行した。しかしアオリスト（第 2 時制グループ）では能格構文を保持している。この再編の過程で、絶対格は主格に改造された。そのことによってまた絶対格と主格の文法的構成に関する一致を説明することができる。」(ibid. 208) メッシュャニーノフはアオリストの受動も主格構文であるところでは言っている。下の注 13 に記したように、能格言語に一般に見られる「逆受身」とグルジア語の受動は異なっているが、後者をメッシュャニーノフは主格化と見なす。

メッシュャニーノフはグルジア語以外にカルトヴェリ諸語のチャン語（ラズ語）とメグレ語の能格構文の発達も検討している。ここにはグルジア語の能格構文の発達とは全く異なる発達がみられるために、メッシュャニーノフの言う類型（構文）の進化にとって興味深い例がここにも見られるからである。まず、メッシュャニーノフはラズ語を取り上げている。上で述べたように、チャン語（ラズ語）では、本来の能格の範囲は時制とは無関係に全ての他動詞の主語に拡張されている。メッシュャニーノフはこの言語について次のように述べる：「チャン語（ラズ語）では、能格性はグルジア語よりかなり完全に保たれている。チャン語では、能格構造をもつ全ての言語 (cf. 山岳ヤペテ諸語) と同様に、能格構文は他動詞の全ての時制に現れ、自動詞に対立している [自動詞には現れないということ]。従って、他動詞の全ての時制において主体は能格

<sup>13</sup> 一般に「逆受身 antipassive」と言われるものは、次のように能格構文から派生される：基底の A 名詞句（他動詞の行為者名詞句）は逆受身の S（自動詞の主語）になる。基底の O（他動詞の目的語）は周辺的な名詞句になる（周辺的な格、前置詞等によって標示される）。この O は省略することもできる。逆受身構文にはそれを表す明示的な形態標示がある（以上の定義は R. M. W. Dixon 1994: 146 より）。この基準をメッシュャニーノフのグルジア語の例と比較すれば、kaθ'-ma[n]（基底の A=能格）は kaθ'-is mier（受動では後置詞による格形）に、t'eril-i（基底の O）は受動でも変わらない。従って、グルジア語の「受身」は通常の逆受身とは異なることが分かる。本論のアヴァール語の逆受身と比較せよ。

に立ち、それはチャン語でフォルマント **-q** をもつ。このフォルマントは、グルジア語で **-ma[n]** のように、行為者の表現以外に如何なる意味でも使われない斜格の石化した形である。この能動格に、上で既に言及したように、**Н. Я. マール**は与格代名詞の名称を授けているが、**А. チコバヴァ Чикобава** はそれを叙述格 **повествовательный** と名付けている。他動詞をもつ文の目的語は、自動詞の主語と同じ格に立つ：**koθ'i gulun «человек ходит», koθ'i-q kiduφs oq'or-i «человек строит дом»**。このチャン語の統語法の特徴は、山岳諸語にそれを近づけ、残りの全ての点でこれら2つの言語[チャン語とグルジア語]が近いにも拘わらず、グルジア語からチャン語を遠ざけるのである。」(ibid. 208)

メッシャニーノフはさらにチャン語とグルジア語を比較し、その文構造が異なることを強調し、言語研究にとって語彙・統語研究の必要を述べている：「チャン語の資料と (...) それと平行なグルジア語の資料をもとに、2つの指摘された統語構造の特徴を正確にすることができる。このために、第1に必要とされるのは、文中の語や、曲用や活用の変化形などの狭い形態的分析ではなくて、言及されている言語の各々の統語法の主要なノルマの解明のための語彙・統語的研究である。」(ibid. 209) さらに「何よりもまず出発点とみなさねばならないのは、変化するのは形態法の分野での言語類型学ばかりでなく、文構造全体である、という立場である。ところでこの文構造に依存して、統語的標示の内容が変化し、語の間の質的に別の統語的關係が起こるのである。」(ibid. 209-210)

## 6.

上で見たように、メッシャニーノフの研究には、ヤーコヴレフのような言語構造と社会的な階級制度とを直接に結びつけるというような乱暴な議論はない。我々にとっても馴染みのある能格言語と対格言語の構造から、その類型推移を考察しており、議論そのものは理解しやすく、合理的な理論展開が行われている。彼のその他の類型(例えば、抱合、所有といった類型)を立てることが可能であるかは大いに議論のあるところであろう。こう言ったことが書かれている彼の研究を正確に理解することは難しい。しかし上で検討したメッシャニーノフの理論は、この時代においても、また現代においても優れたものである。1940年代にこのような研究がソヴィエト内で行われていたことは、驚きでもある。そこで展開されている能格理論(北方諸語やコーカサス諸語は概ね能格言語類型を見せる)や統語論を中心にする言語類型論はその後のソヴィ

エト言語学の大きな遺産になった<sup>14</sup>。対して、西欧での能格研究ブームは戦後かなり経った 70 年代以後に起こっている。例えば、R. M. W. Dixon (1972, 1979), B. Comrie (1978, 1981), F. Plank (1979)。これについては R. M. W. Dixon (1994: xiv) を見よ。これは世界の辺境にある言語の記述が行われた後に能格言語に研究者の目が向き始めたことによる。

## 7.

ソヴィエトの類型論学派の印欧語研究者たち（С. Д. Кацнельсон, А. В. Десницкая, 等）に見られる印欧語の主格構文の中により古い段階の言語層を探ろうとする研究は、主格言語以前の印欧語の文構造に能格言語類型あるいは能格言語類型とは異なる言語類型を仮定した（Кацнельсон (1936), Десницкая (1984: 7–56) を参照。前者は「能格的過去 эргативное прошлое」を、後者は「印欧諸語における直接補語のカテゴリーの発達」研究から非能格的過去を仮定した）。後者は後にクリモフ Г. А. Климов によって「活格構造 активный строй」の言語類型として纏められる<sup>15</sup>。この理論を用いた成果は、例えば、ペレリムーテル И. А. Перельмутер (1977) の『共通印欧語とギリシア語の動詞』、ガムクレリゼ Т. В. Гамкрелидзе, イヴァーノフ Вяч. Вс. Иванов (1984) の『印欧語と印欧人』やステパーノフ Ю. С. Степанов (1989) の『印欧語の文』のような印欧語研究に現れている。ガムクレリゼ&イヴァーノフは、その 5 章「活格類型学としての印欧語祖語」(pp. 267–319) の中でこの理論に拠っているし<sup>16</sup>、ステパーノフはその 1 章「印欧語文の主要なタイプ」(pp. 10–68) の中で

<sup>14</sup> デスニーツカヤの次の発言を参照：「メツシャニーノフの歴史・類型論研究の課題のこの著しく柔軟な定式化へ導いたものは、比較言語学の分野での 40 年代に展開されたソヴィエト言語学者達の研究（印欧語、フィン・ウゴール諸語および他の諸言語の資料を基にした研究）ばかりでなく、彼を特に捉えたシベリアの少数民族の諸言語（古アジア諸語、ツングース・満州語）の文法構造の研究の深化でもある。」(ibid. 35)

<sup>15</sup> Г. А. Климов (1977) 参照。邦訳、石田修一訳『新しい言語類型学—活格構造言語とは何か』三省堂 1999。

<sup>16</sup> ガムクレリゼとイヴァーノフによる『印欧語と印欧人』(Тбилиси, 1984) の最も興味深い箇所は、彼等によって印欧祖語に仮定された声門化閉鎖音による子音組織の再建であるが、文法構造に対しても興味深いことを述べている。彼等は印欧祖語がクリモフのいう活格言語であったとするが、類型進化についての考えはクリモフとは異なる。彼等は能格構文と対格構文は深層的には同じであるので、双方向への変化が可能であるという。しかし活格構文とは深層構造が異なるため、これは一方向への変化しか許容しないという。彼等のこれを述べている箇所を参照：「能格類型と対格（主格）類型は、共通の類型的クラスに結集している。このクラスにとって本質的なものは、言語の深層構造における主体・客体的関係と他動性対自動性の原理による動詞の対立である。これと対立しているのが活格類型言語であり、この言語の構造的決定要素を確定しているのは、活動性対不活動性原理による名詞の 2 分法の存在である。従って、能格構造と対格（主格）構造の間の違いは、単

“активность — неактивность” 特徴による 4 つの構造・意味的な図式タイプ (I: Inactive S(subject) + Inactive V(erb) [= perfecta tantum], II: Active S + Active V [= activa tantum], III: Active S + V + Inactive O(bject), \*IV: Active S + V + Active O [= “структурно-синтаксический инактив” (Гамкрелидзе & Иванов 1984: 277)]) を印欧語祖語の主要な文タイプと見なしている。

## 8.

ソヴィエト言語学にはこれ以外にロシア語研究を中心とする学派があるが、ほとんど類型論学派とは直接的な関係をもっていない。ヴィノグラードフの著名な『ロシア語(語についての文法学説)』(1945)にはメッシュャニーノフからの引用はあるものの、その内容は伝統的なロシア語の文法論である。モスクワ音韻学派の諸論文にもあの時代にソヴィエト言語学を牛耳ったメッシュャニーノフ的類型論学派の影響はない(勿論、統語論中心の類型論学派からモスクワ音韻学派への影響が少ないのは当然であろうが。モスクワ音韻学派の人たちはヴィノグラードフらとともに「ブラックリスト」に入っていた(Реформатский 1970: 31))。50年のスターリンによるマール主義批判以後、類型論学派は活動を停止するが、スターリンの死後また復活している(例えば、Кацнельсон は 50 年にレニングラード大学教授を解雇され、3年間地方のイヴァーノヴォ教育大学で働き、スターリン死後直後の 53 年 4 月にレニングラード外国語大学に招聘、1 年後にはソ連科学アカデミー言語学研究所に移っている)。その復活は政治的な復活というよりも学問的に彼らの研究レベルが高かったことによるのであろう。1964 年にソ連科学アカデミー言語学研究所レニングラード支部で「異類型諸語の能格文構造」会議が開催されているが、これは類型論学派の復活を象徴する会議である(組織委員会は В. М. Жирмунский, С. Д. Кацнельсон, О. П. Суник, И. О. Гецадзе, А. Н. Жукова)。後に Жирмунский によってその会議での議論の内容が発表されてい

---

に表層構造にだけ関与するのである。行為の他動性対自動性の対立に基づいた、そしてこの主体・客体関係と結びついた、深層関係レベルにおけるこれらの類型の同一性にも拘わらず、それら 2 つの構造の違いは、基本的に主体・客体的区別の異なる特徴付けの原理に属している。能格性と対格性(主格性)は、同じ深層関係の 2 つの異なる表層・構造的表現である。それ故、能格構文から対格構文への転換あるいはその逆の転換の際に、言語において何か本質的なものが変化するという事は、言語の構造的決定要素の観点からすれば恐らく根拠のないものであろう。そのような転換の際に変化するのは、深層的な主体・客体関係を表す表層構造だけである。深層的な主体・客体関係はそのような表層・構造的な改編の際にも不変のままである。言語の深層的關係に作用する、言語における構造的シフトは、能格構文から対格構文へあるいはその逆の転換の際に生ずるのではなくて(現代インドアリア諸語、現代イラン語を参照)、活格構文から能格構文あるいは対格構文への転換の際に生ずるのであり、このことは言語の深層構造におけるここから帰結できるあらゆる結果を伴って、言語内容面での本質的なシフトを前提としているのである。(ibid. 314)



る (В. М. Жирмунский 1967). これによると、14 項目に亘って能格構文の質問が事前に参加者に送付されている。この質問を見ただけでも能格構文の深い理解に基づいたものであることが分かる。例えば、「1. どのような特徴によって能格構文の存在を定めるか」、「2. 当該言語には能格構文だけが存在するのか、あるいはまた主格構文も存在するのか。もし両構文が存在するならば、どんな場合にそれぞれが使い分けられているのか」、「3. 当該言語において主格構文は能格構文から発達したのか、あるいはその逆かどうかを仮定する根拠はあるのか」、「4. 当該の言語には能格構文の変種はあるのか、もしあればそれらは何が異なっているのか、どのような場合に使われるのか」、「5. 当該言語ではどのような能格が使われるのか (具格, 与格, 活動格, 能格, 他)」、「7. (広い意味での) 能格の内の一つにたつ名詞を能格文の文法的な主語 (あるいは論理的主体) と見なすべきか」、「8. 能格構文と主格構造の受動 *passive* (被動態) との同一化のための根拠は存在するのか」、「9. 能格構文と態 *voice* が共存する言語 (例えば、グルジア語や幾つかの北方諸語) ではそれらの関係はどのようなものか」、「10. 能格構文の自動詞における動作主の格と主格構造言語の主格とを同一化すべきか」、「11. 主格構造言語 (印欧語, チュルク語等) には能格構文に類似した現象は存在するのか。このような言語の《能格的過去》について語る根拠はあるのか」、「13. 能格構文は言語の類型的分類の基準の役割を果たし得るのか」、「14. 文の能格構造を思惟の歴史と結びつける必要があるのか」。

以上のことから分かるように、生物学とは異なり、ソヴィエト言語学は「能格言語構造」について戦前より続く歴史があり、ソヴィエトの言語類型論はソヴィエト言語学の中でも世界に誇れる成果をもっている。

## 9.

これ以外に、ソヴィエト時代の言語研究としては、音韻論研究 (特に、Р. И. Аванесов, В. Н. Сидоров を中心とする、モスクワ音韻学派の成果)、ロシア語研究 (60 年, 70 年, 80 年アカデミー文法、ロシア語方言辞典、А. А. Зализняка によるロシア語文法辞典など)、スラヴ語研究 (中でも最も困難なテーマであるスラヴ語アクセント論研究への Иллич-Свитыч と В. А. Дыбо を中心とするモスクワ・アクセント論学派による貢献)、ソヴィエト領内の文字ができて間もない *младописьменные* 言語 (チュルク諸語, カフカース諸語, 北方民族諸語, フィン・ウラル諸語, イラン諸語, モンゴル諸語) の記述的研究<sup>17</sup>, 各民族語の言語研究 (各民族語のアカデミー文法の出版),

<sup>17</sup> 特に Виноградов В. В. (гл. ред.) *Языки народов СССР*. Т. 3, 4, 5. М. 1966-1968 は貴重である。

及びソヴィエト類型論を援用した印欧語の歴史研究 (С. Д. Кацнельсон, А. Н. Савченко, И. М. Тронский, А. В. Десницкая, И. А. Перельмутер, Т. В. Гамквелидзе, Вяч. Вс. Иванов, etc.) などがある。この中で類型学研究と密接に関連しているのは、カフカース諸語と古シベリア諸語の研究であろう。メッシュャニーノフの研究で使われるのはこれらの諸言語である。

またソヴィエトで独自に発達したのはノストラ言語学である。印欧語, カルトヴェリ語, アルタイ語, ウラル語, アフロ・アジア語, ドラヴィダ語等を含む起源的に同語族と仮定される大語族をノストラ大語族 *Nostratic linguistic macrofamily* と称する。60年代よりモスクワの若い研究者 (В. М. Иллич-Свитыч, А. Б. Долгопольский, В. А. Дыбо) によってこの研究の進展が見られた。代表者である Иллич-Свитыч はアクセント論での優れた比較研究と並んで, 音法則を打ち出すやり方でノストラ語族の比較を試みている (彼の突然の死の後に出版された В. А. Дыбо 監修『ノストラ諸言語の比較試論 I, II, III』1971–1984. 参照)。ペーザーセン Н. Pedersen 由来のノストラ大語族仮説が何故ソヴィエトに再現したのか? ノストラ言語学はマールによる「4 要素」によって世界の言語の起源を関係付けようという説とは直接的な関係は窺えないが, しかし既存の比較言語学の枠を乗り越えて, 世界の言語の起源 (あるいは系統分類) を求めようとする考えにはマールと共通の思想が流れているように思われる。ノストラ語族の比較研究は印欧語研究にも影響を与えている。その最近の成果は, モスクワのノストラ言語学のもう 1 人の代表者 А. Б. Долгопольский (1930-2012, 後にイスラエルに移住) による大著『ノストラ語源付き印欧語辞典 I, II, III』(Москва, 2013) である。また Долгопольский に続く世代のノストラ言語学の研究者に С. А. Старостин (1953-2005) がいる。彼は極めて多くの言語の知識をもって, 世界の言語の比較研究をしているが, その中でも大きな研究として С. Л. Николаев とともに『北コーカサス語源辞典』(Moskow, 1994) を出版した。スターロスチンはカフカース地域のフィールド調査も行っており, この辞典は資料としても信頼できるものである。ノストラ語族が証明できるかは不明であるが, 彼らはその音韻対応の試みを広範な資料を用いて試みている。その資料も私が知る限りかなり信頼できるものようである。

## 参考文献

- Алексеев М. Е., Атаев Б. М. (1997) *Аварский язык*. М.  
 Бгажба Х. С. (1964) *Русско-абхазский словарь*. Сухуми.  
 Бокарев А. А. (1949) *Синтаксис аварского языка*. М.-Л.  
 Виноградов В. В. (1945) *Русский язык (Грамматическое учение о слове)*. М.-Л.

- Гамкрелидзе Т. В., Иванов Вяч. Вс. (1984) *Индоевропейский язык и индоевропейцы*. Тбилиси.
- Десницкая А. В. *Сравнительное языкознание и история языков*. Л.
- Долгопольский А. Б. (2013) *Индоевропейский словарь с ностратическими этимологиями*. I, II, III. М.
- Жирмунский В. М. (1967) (ответ. ред.). *Эргативная конструкция предложения в языках различных типов*. Л.
- Иллич-Свитыч В. М. (1971-84) *Опыт сравнения ностратических языков*. I, II, III. М.
- Кацнельсон С. Д. (1935) *К генезису номинативного предложения*. М.-Л.  
 — (2010) *Историко-грамматические исследования*. СПб.
- Климов Г. А. (1977) *Типология языков активного строя*. М. [石田修一訳『新しい言語類型学—活格構造言語とは何か』三省堂 1999]
- Мадиева Г. И. (1967) *Аварский язык. Языки народов СССР. Иберийско-кавказские языки*. Том 4-ый. М.
- Марр Н. Я. (1903) *Грамматика древнеармянского языка*. СПб.  
 — (1910) *Грамматика чанского (лазского) языка*. СПб.  
 — (1926) *Абхазско-русский словарь. Пособие к лекциям и в исследовательской работе*. Л.  
 — (1933-35) *Избранные работы. Этапы развития яфетической теории*. Л. 1-5.
- Мещанинов И. И. (1936) *Новое учение о языке. Стадиальная типология*. Л.  
 — (1940) *Общее языкознание. К проблеме стадиальности в развитии слова и предложения*. Л.
- Перельмутер И. А. (1977) *Общеиндоевропейский и греческий глагол*. Л.
- Степанов Ю. С. (1989) *Индоевропейское предложение*. М.
- Услар П. К. (1889) *Этнография Кавказа. Языкознание. III. Аварский язык*. Тифлис.
- Реформатский А. А. (1970) *Из истории отечественной фонологии*. М.
- Яковлев Н. Ф. (2006) *Грамматика абхазского литературного языка*. Сухум.
- Comrie B. 'Ergativity', pp. 329-74. *Syntactic typology: studies in the phenomenology of language*, edited by W. P. Lehmann. University of Texas Press.  
 — (ed.) (1981) *The languages of the Soviet Union*. CUP.
- Dixon R. M. W. (1972) *The Dyirbal Language of North Queensland*. CUP.  
 — (1994) 'Ergativity', *Language*, 55. 59-138.  
 — (1994) *Ergativity*. CUP.
- Nikolayev S. L., Starostin S. A. (1994) *A North Caucasian Etymological Dictionary*. Moscow.

Plank F. (ed.) (1979) *Ergativity: towards a theory of grammatical relations*.  
London.

Trubetzkoy N. S. (1985) *N. S. Trubetzkoy's Letters and Notes*. Prepared by R.  
Jakobson. Mouton. [*Письма и заметки Н. С. Трубецкого*. Москва. 2004.]